

季寄
註解

改正月令博物笈

十月部

一





改正月令博物筌
 冬之部

十月部目錄
 △印ハ俳借の季をりの物あり

養生の法。兩風の孝。米の豊凶。妙藥其外人家重室の事ハ取々はりる
 目録ハハまるる

發端 冬の由來 冬の異俗

青 陰陽生 異俗

立冬節 三ノ小雪 十六日

十月日 此部ハ十月日の定アたる事支の定アたる事を集めたる也

全夢の旬 四ノ更衣

衣服の式 四ノ拜墳

進火炭 四ノ熊燔食

火開 四ノ神送

御玄猪 四ノ能勢餅

達磨忌 四ノ殘菊宴

十夜 四ノ大興福寺法花會



△麥蒔

△枯蘆

△

△枯柳

△落葉

△

△木の葉

△木葉の雨

△

△朽葉

△蕪

△

△大根

△冬木の樹

△

△雪の下

△松の花

△

△生類

爰は十月の鳥けだりの魚虫のうゝをあらわす

△鶯子啼

△

△必用

此部は十月一ヶ月の天氣乃見の中其外必用の報をのむ

△破軍の方

△日刻

△

△出行作事

△樂事

△

△天氣

△占候

△

△養生

△衣服式

△

△生花式

△料理献立

△終

十月部目錄終

月令博物笈冬の部發端

九き内々書るる冬の氣の旺る所
 月令曰天氣上騰地氣下降
 天地通せん
 閉塞し
 冬とあると
 いらし註ふ
 天氣上り
 騰地氣
 下り降るハ
 天地のく其
 位を正し
 けハ爲主といふ所みまらけ



冬泉 釋名小曰冬終萬物
 終成る所以と有これハ

冬ハ一年の終よてよろばの物成就
 せりとし事への和語又曰冬をふも
 と訓せしハひもとり事ふといと
 五音相通なるなり

冬爲王 方ハ北とハ易の統圖小曰
 日冬ハ北方の黒道を行

これを北陸とて有るより北を
 冬の方とて有る。味ハ鹹とつうさ
 ぐる事ハ冬の氣ハ水ハ屬する也
 海水の塩とゆきと味とす也。色を
 黒しと八月令天子玄堂の左介
 居り玄路のり鐵驪を駕し
 玄斨と載黒衣をきると有る
 玄堂ハ北の方の堂とて玄路ハ
 黒き車鐵驪ハくろむまれ車玄
 斨ハくろきはこの車とてあらく
 黒色と主とて有る也。臟ハ腎
 とハ人の五臟の内にて腎ハ水を主
 たる臟たる也。心ハ配當とて
 氣ハ精とハ腎精とて之。卦ハ坎
 とハ坎ハ水の象たる也。星ハ辰
 とハ辰星北にあつたり。人ハ智
 とハ腎ハ聞蔵の官とて人の智
 恵とくす臟たる也。智ハ冬に
 當る也。神ハ玄武といこれ黒
 き蛇とて以て冬の神とて有る

冬異名

玄英。顓頊。玄冥。上天。
 清冬。三冬。九冬。

異名註

爾雅の註曰氣黒く
 して清英とて有る。顓頊と
 禮記其帝ハ顓頊と有。玄冥ハ
 これも禮記亦申ハ玄冥と有。

上天ハ禮記ハ天氣上騰ると
 有とあり。三冬ハ東方朔の疏ハ出
 づる字よりて冬三月の事とあり。
 九冬ハ元帝纂要ハ冬とて玄冬九冬
 とあり。清冬ハ皮日休ハ詩ハ冬を
 清冬と作ま有り。ころつ也ハ雲の
 御鈔ハ出て雪氷るども露のこ
 めるよりなれるものなる也。冬を
 をころつ也といふなり。こふゆハ
 拾遺集ハ出て三冬つきとてし
 きぬれがとよめて漢土ハ三冬と
 といふは同じ也。

哥秘蔵 きまつけ 小野峯雄
きまつけとちがむる末ハ八重玉辰
立田比山とちまもめなくに
夫木 為相

波由まき入江の南まきうらうら
お日れそらぞそそのわけなき

非を言とおしむ降はしそがき支考

ゆなむ 〇冬の朝の事
哥 蔵玉集

ゆなむおきてえこればゆな乃
庭ももくくは降はけこのれ

らひむむ 〇冬を主の神之喜の
保姫とひ

夏の神をつねとつ秋を於四娘
とりつむも童蒙抄子出る春

秋ハ傲の季に用ふるゆに亦に委
しく注はれまも神祇おはる

の氣を主造化の神とて候ふ名なる
〇右の外三冬みくるる季節此
りの別は三冬の部有

十月の部 〇印と記は分
季とあり物



其至小生じたる
一陰の上小月々
にまこ二陰つ
からして十月
は六陰とさる
て純陰の月

調子ハ律子として應鐘とつハ水
の成長しるるに禮記月令ニ出應

陽ハ應どるなり鐘ハ動くとい
ハ心よて萬物動きさるる

卦ハ地坤とハ上の圖はて極
陰よて地のうらむ

十月異名 〇陽月 〇良月 〇孟冬
〇上冬 〇開冬 〇玄冬

〇秦正 〇小春 〇抽冬
〇林之月 林谷うり月 〇むきり月

〇志だれ月 〇上冬 〇初冬月
〇初冬月 〇小六月 〇こま月

異名註。陽月と此月一陽也。めてきぎすを事爾

雅と出たり。良月ハ左傳より出

より十の数の満る事を良といふより。左傳の注は見えたり

孟文ハ月令は出はし冬の冬と

り義之。上冬ハ纂要ふ出これ

もはドめの冬といふ事之。開冬

とハ顔延之の詩より作まり冬の

ことらといふ事之。孟文これ纂要

より出てけり。此冬之。秦正ハ歲

時記出秦の世の正月ハあり月

といふ心之。小春ハ事文類聚ハ十月

向くはして春のどきといふとあり

。上無といふハ陰陽の敷り下り丸ま

ておて十より上の敷はしよつて此月と無

といふ。神無月といふハ此月神々出雲國

集るハ故名のく出雲ふてハ神有月と

り。又一説に此月の異名上無といふは

より俗誤つて神無月といふも

。又真淵の説ハ此月雷聲と出

たり。由ハ雷無月といふもいなり

。此月伊弉册尊山崩し三月月

ゆハ名つくと世間問答より出り

。貝原氏の説ハ卦ハおわてハ坤

として純陰ハあれハ陽未復陽

なきの月ハ神ハ陽の司也。此月陽

なきの月也。神無月といふハ計神出

雲ハあつまり云々といふこと

跡ハこれなき事とあり其外

説多し委しく日本歳時記に

あるハ然ども風雅の道ハ此論ハ

不拘神なき心とよむハ風情あり

てよ。次ハ證哥と出し作例と次

哥 秘藏 神無月 菅原忠音

下。とやまのうたをいふなりふなり

とがれいひまなき神無月

莫傳 神無月

聖書なる松のそをれをいふ

神無月と何といふ

千載 林青月 道因法師

阿し吹ひらぐらなるの採りて
あられ対ふる林青月う那

新京 林青月 高光

林青月風く紅まのちる附い
そこはうとなくぬかぬき

非神 月摩鞆の口に木のまの野水

十月の月影の不見見(ふくろ)支考

林青月 髪を人もさむりの園十

垣るんやたうまを林青月支考

哥 藏王 去れ月

ちりもろこの後のしづれ月

冬れもろめよりとあまじ

同 乙の五月

まも木と初月月のねほけけ

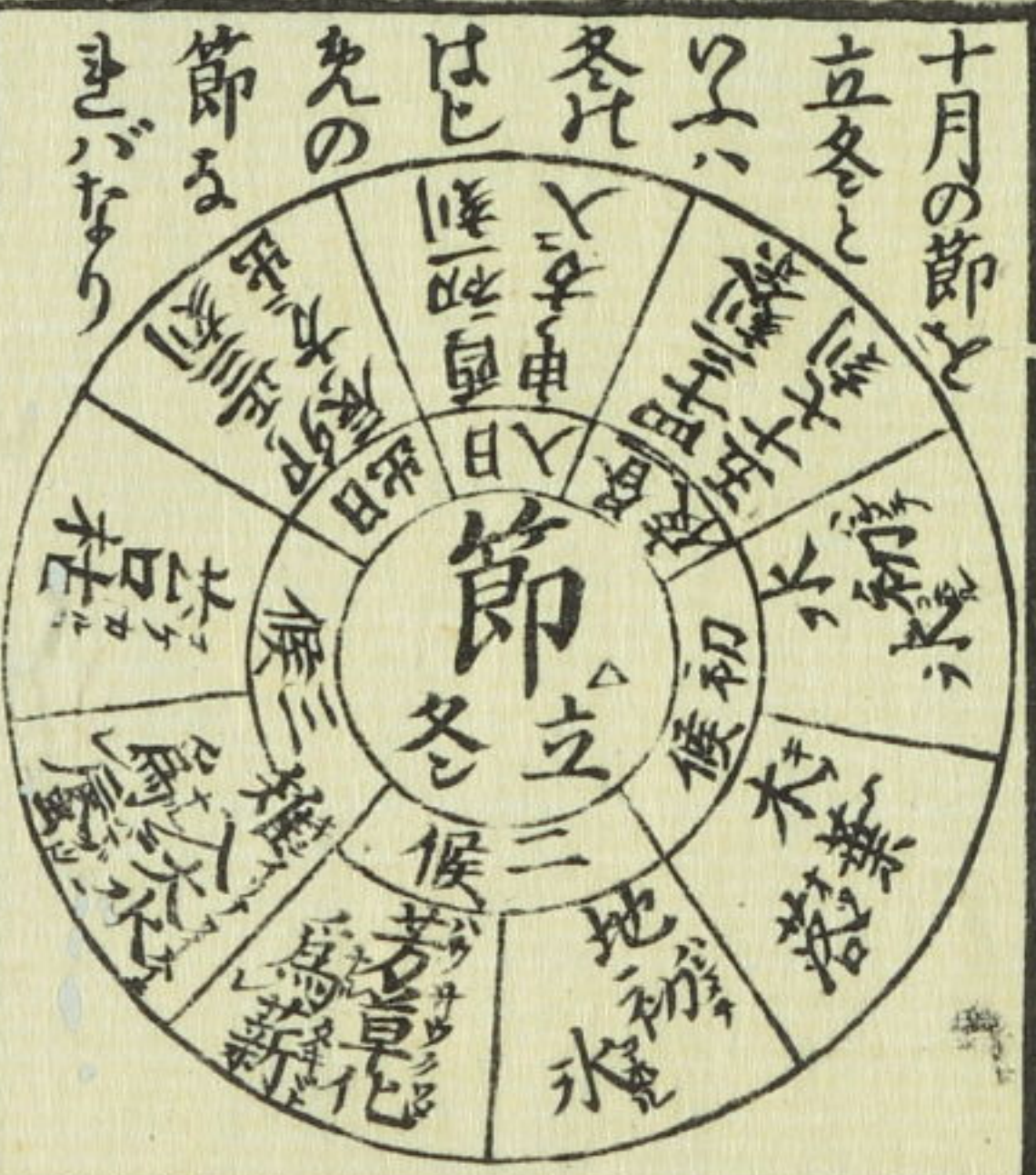
まがれも白まきけのそらう

非 鵲鴉の尾さすまる小まの 后女

尾さのもぬもよふまふまの 人男

立冬

節の名。七十二候。草木七十二候
昼夜長短。日の出入左に記次



十月の節と
立冬と
雨水と
惊蛰と
春分と
清明と
谷雨と
立夏と
小满と
芒种と
夏至と
小暑と
立秋と
处暑と
白露と
秋分と
寒露と
霜降と
立冬と
小雪と
大雪と
冬至と
小寒と
大寒と

此頃水始て氷。木の葉落散
つこと。地始て氷とははと免に

水が氷。まてそれよりだんく地も
いてる。この事。芳州爲新とハ

よきふやいの有し秋草もこれく
われしだにるをつこと。雄入大水爲屋

月令の注よ屋ハ蛟のさひこれと
とぶすのもひそまのりのふるうらつる

とくふ心ごと。苔枯ハ草木ばう
よわらば苔までが枯るとい事
哥 千載さまののさだもとハお
かれぬや下うややまてきぬらん

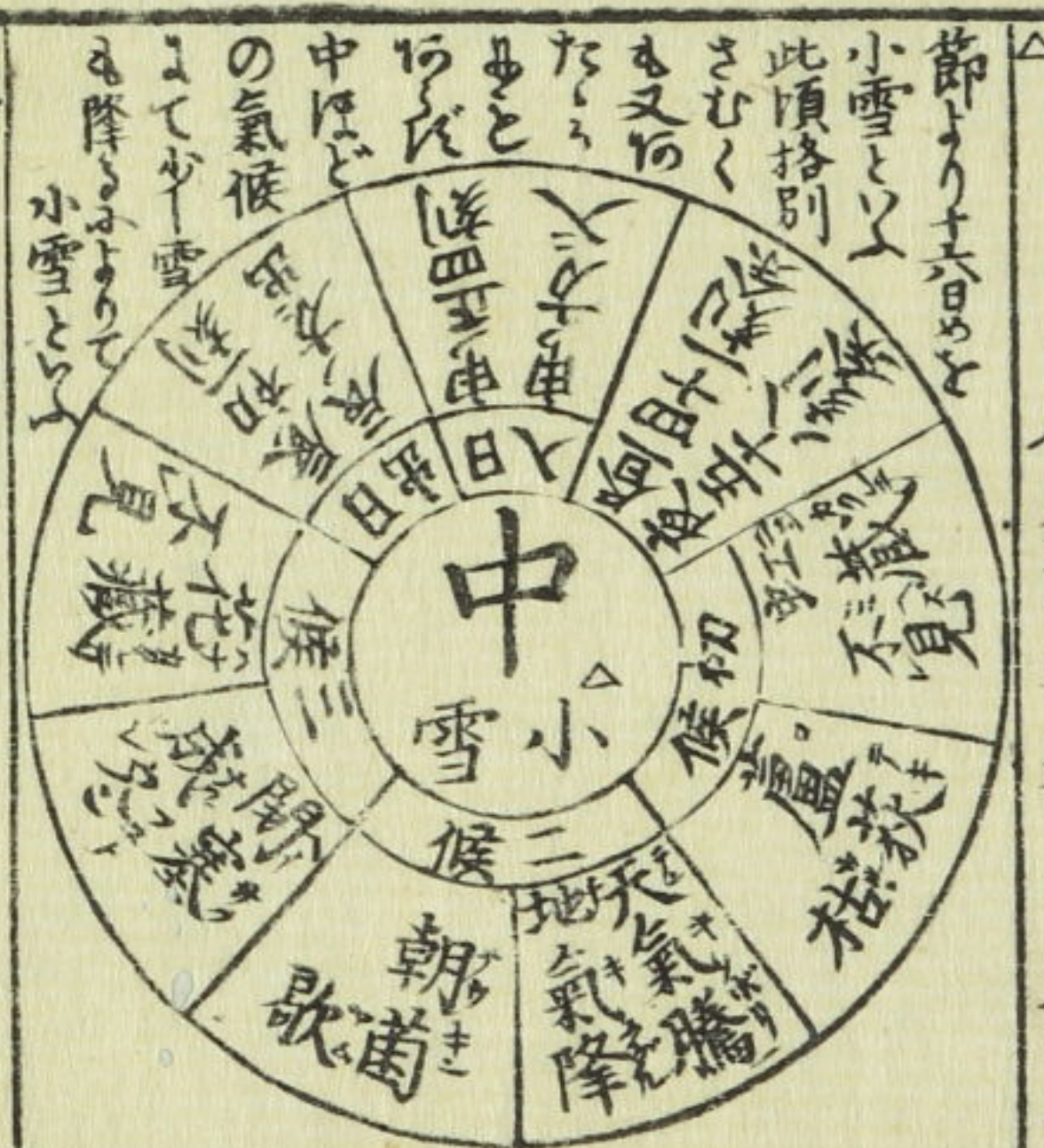
節の占候

立冬の日土ふあられ来
年麦貴し四耕宜し

壬子なれ来年大熱し節の日暗れ
来春雨多し北風あれ六畜ふさひつり

小雪

中の各七十二候。卯木七十二候
日出。昼夜長短。左に記し



。虹藏不見、此頃より来三月まで
虹あつてはまきとく。昔杖枯あしれき
枯る。天氣騰地氣降とハ天の陽
氣去りて地の陰氣下る也。寒氣
せんぐにのよふと。朝菌歌を
なびくせざる。閑塞成冬と

陽氣まがりて寒き冬とむる
あり。花藏不見ハ花ハ大抵陽氣
を得てひくくもの也。陽氣なき
時なればかくれて不見たり

日令

此部は八日の定くる事
免子支の定くる事を出

朔

今日沐浴せし長壽子なる

朔

今日天子御装束を
改めたる南殿を出

御なりて節會行つて二献の後
永魚と群臣より奉事根元出

哥

元弘立后屏風
活れる竹代の頁とよつひを
大宮人子々々々たり

朔

十月朔日、先づ御衣之つり
掃部寮夏の御装束と

朔

十月朔日、先づ御衣之つり
掃部寮夏の御装束と

撤して冬の子改めたる。天皇南殿
不出御ありて節會行つて是を孟

冬の旬といふ。冬更とばくふ。六季。四月の

俳^ひあな^なの^の神^{かみ}と成^{なり}たり更^{さら}衣^え 李^り下^げ

朔^{しやく}衣服^{いふく}式^{しき} 諸^{しよ}家^か人^{にん}自^{より}來^{きたり}年^{とし}三^{さん}月^{げつ}晦^{まい}日^{にち}
迄^{いた}衣^えと^と着^きせら^るる^事也^{なり}

朔^{しやく}拜^{はい}墳^{ふん} 唐^{たう}土^どて^て今^{いま}日^{にち}貴^き賤^{けん}も^も先^{せん}
祖^その^の墳^{ふん}と^と拜^{はい}し^祭と^とり^原原^{げん}

説^{せつ}よ^よ本^{ほん}朝^{てう}よ^よても^も今^{いま}日^{にち}先^{せん}祖^そと^と祭^{まつ}る^{べし}と^と
い^ひり^り唐^{たう}日^{にち}本^{ほん}の^の祭^{まつ}る^事委^{あづか}り^り 歲^{さい}時^じ註^{ちゆ}也^{なり}

朔^{しやく}進^{しん}爐^ろ炭^{たん} 唐^{たう}よ^よ今^{いま}日^{にち}有^あ司^し爐^ろと^と炭^{たん}
と^と奉^{ほう}る^事也^{なり} 類^{るい}聚^くる^事也^{なり}

朔^{しやく}燂^{せつ}燂^{せつ}食^{じき} 映^{えい}人^{にん}十^{じゆ}月^{げつ}朔^{しやく}日^{にち}多^た多^た
裏^{うら}と^と作^{つく}て^節物^{ぶつ}と^とり^節也^{なり}

楚^その^の人^{にん}多^た燂^{せつ}燂^{せつ}と^と食^{じき}ひ^ひ或^{ある}ハ^ハ糖^{とう}と^と爲^な
そ^の事^{こと}を^を類^{るい}聚^くる^事也^{なり} 燂^{せつ}燂^{せつ}と^とハ^ハ酒^{しゆ}の^の浮^う
こ^のか^かり^りたる^事也^{なり} 燂^{せつ}燂^{せつ}の^の事^{こと}を^を類^{るい}聚^くる^事也^{なり}

朔^{しやく}爐^ろ開^{かい} 燂^{せつ}燂^{せつ}會^{かい} 燂^{せつ}燂^{せつ}開^{かい}會^{かい}今^{いま}日^{にち}
燂^{せつ}燂^{せつ}と^と開^{ひら}き^{三月}廿^{にじふ}日^{にち}也^{なり}

唐^{たう}よ^よて^て今^{いま}日^{にち}爐^ろと^と開^{ひら}き^中中^{ちゆう}て^て肉^{にく}と^とり^り
て^て飯^{いひん}食^{じき}ひ^ひ是^{こゝ}と^とた^たん^る會^{かい}と^とり^り 歲^{さい}時^じ雜^{ざつ}記^き也^{なり}

此^{こゝ}例^{れい}よ^より^り本^{ほん}朝^{てう}茶^て人^{にん}此^{こゝ}日^{にち}より^り爐^ろと^と開^{ひら}
き^{いん}賓^{ひん}客^{かく}と^と茶^てと^と喫^くひ^詩有^あ 歲^{さい}時^じ記^き也^{なり}

神^{かみ}送^{そう} 神^{かみ}の^の旅^{りょ} 神^{かみ}の^の留^{りゆう}守^{しゆう} 此^{こゝ}日^{にち}諸^{しよ}
と^とい^ひり^り委^{あづか}り^り 日本^{にっぽん} 歲^{さい}時^じ記^きに^に
出^いづ^りり^り面^{めん}白^{はく}き^事也^{なり}

非^ひ道^{だう}と^とい^ひは^はま^まに^に神^{かみ}の^の石^{いし}と^とり^り野^の水^{みづ}
か^かつ^つる^事也^{なり} 神^{かみ}の^の石^{いし}と^とり^り野^の水^{みづ}
狂^{きやう}馬^ばが^がつ^つて^て風^{かぜ}と^とり^り神^{かみ}の^のか^かし^しま^ま立^た
本^{ほん}の^の葉^はと^とり^り神^{かみ}の^のか^かし^しま^ま立^た

朔^{しやく}御^{おん}女^{にょ}猪^{しゆ} 亥^{がい}の^の子^こ 能^{のう}勢^{せい}餅^{もち}
昔^{むかし}ハ^ハ山^{さん}猪^{しゆ}と^と奉^{ほう}る^事也^{なり} 日本^{にっぽん} 記^き等^{とう} 出^い
○ 應^{おう}神^{しん}天^{てん}皇^{かう}の^の御^{おん}代^{だい}より^り 毎^{まい} 歲^{さい}
亥^{がい}の^の月^{げつ}亥^{がい}の^の日^{にち}を^を祝^{いわ}ひ^らる^事也^{なり} 御^{おん}
亥^{がい}猪^{しゆ}の^の餅^{もち}と^と奉^{ほう}る^事也^{なり} 詔^{みことま}り^りて^て
攝^{せつ}州^{しゆう}能^{のう}勢^{せい}郡^{ぐん} 木^き代^{だい}村^{むら} 切^{きり}畑^{はたけ}村^{むら} 兩^{りゆう}
村^{むら}より^り貢^{こう}と^とり^り 餅^{もち}を^を割^わり^りて^て奉^{ほう}る^事也^{なり}
當^{たう}家^かハ^ハ能^{のう}く^く清^{せい}め^め赤^{あか}小^こ豆^{まめ}と^と餅^{もち}
米^{こめ}と^とり^りて^て餅^{もち}と^と奉^{ほう}る^事也^{なり} 花^{はな}を^をか^かへ^て

志のふの花葉とかいしきとん色
 うす赤しこれ八家の子れ肉状
 表しうるく下學集よ曰豕ハ每
 年十二子を生む閏年ハ十三子と
 生む故ハ婦人これを禊ふとつり
 されハ童謡ふ亥此子のりハ親ハ
 子うめとりハ此故あろう十月亥の
 日ハ餅をくハ無病長生あり朝義
 其外毒しくハ歳時記拾遺ハ出り
 女の祝すけると甚面白し見るとし
 哥蜻蛉日記二万代といくハ山道の
 いのことより君つらうよといふ
 狂 藤原の留さるふつくまは藤原立南
 今おあけハ文雅の上のりちおし時風
 狂 藤原舎しあうよづれふきりりか
 さてもいこの版はこく 貞松
 上 今日槐の実を食四不成 今日房事
 巳 まれば百病と去る日就日と慎べし
 日 五 達磨忌 達磨ハ南天竺の人ハ蘆の
 葉ハ衆てりろじとり

禪宗を弘む大和十九年十月五日
 寂以委しくハ博物堂ハ出たり

狂 小倉の女の思ふうけうるやめ
 さうりからしてさびと寺うな 貞柳

残菊宴 延喜の御代十月残菊
 の宴とりよはしたまう

狂 秋をよこゆとつなまごてくと
 ひりしそうに秋菊の宴 秀貞

狂 秋をよこゆとつなまごてくと
 ひりしそうに秋菊の宴 秀貞

狂 秋をよこゆとつなまごてくと
 ひりしそうに秋菊の宴 秀貞

十夜 此月五日より十五日まで淨土宗
 の諸寺よて會式を勤むとす

狂 秋をよこゆとつなまごてくと
 ひりしそうに秋菊の宴 秀貞

狂 秋をよこゆとつなまごてくと
 ひりしそうに秋菊の宴 秀貞

狂 秋をよこゆとつなまごてくと
 ひりしそうに秋菊の宴 秀貞

六和興福寺法華會 一名山階寺 といふ九月

晦日より十月六日まで妙法の大會
とむらうしむ此大會八間院冬嗣公

初めより六日冬嗣公父長岡大臣此
御忌日ふあくる也其為行らるるや

十讚金毘羅祭 讃州鴉足郡
象頭山ふ神代

より御鎮座ある神々御神事八月
晦日より初より十月十日終へ今日奉詣

別して多し故ふ奉らる。金毘羅
道中記といふ本あり此本ハ金毘羅

奉詣海陸の道中と委く記以奉
御利生縁記哥等まで委しくのり

十南都維摩會 南都興福寺
より十有連行るる

哥白川殿七百首 新大納言顯輔
邦を月附ぬらうわけは法とて

あふ此邦にのころそ乃そふ
非維摩をいぬらうの杖のほし尾霜

二十芭蕉忌 俗姓松尾氏初名
ハ半七後承應左衛門

宗房と改非諧と奉吟み學び桃音
より江戸深川の庵ふ芭蕉一株を植

ころ是ふよつて世の人芭蕉の公羽
とよがり尤俳諧中興の祖たり

三十御命講 法花會式もつふ
日蓮上人今日叙以故ふ

法花宗寺院ふおわく御影供と
修するともみえくともかくと云俗に御

の字をとてあめつとこいさるるなり
非頭も花のちるるも今或る雨方

五十下元 今日と下元よりつらむ月
十五日中元の取ちるなり

五十水官解厄 今日水官人間降るの
善悪をまじり天帝を奉

中出大社神事 神あつめ神あり
出雲國杵築村に

何れ祭神大己貴尊と祭の當日
二前より毎年風烈く波あつき日

其日龍蛇藻葉乘て海上を浮む
を取て曲物小盛り神殿に納む
つり其蛇鱗蛇は似て錢形の變
あり尾先ハ魚に似るまゝなし

十京 東福寺に開山
日都聖二國師忌 建仁二年十月

十五日生も弘安三年今日寂し

非 通天の傍と夜や雨山忌 之白

十 此日雞初くなく時場あり
八 たらハ長寿無病なり

廿 不成 今日遠方也事と思む
日 就日 天龍寺佛國國師の忌日

日 廿 惠比須講 誓文揃 此日商家
と等酒宴を催して客をももほく
中より呉服店ハ格別あきハしくす

事ハ商人つねに欺賣の罪を拂ふ
とて誓文揃もの京中ハ官者社
は請て是を誓文揃の社とて大坂
ありハ今官の戎ハ泰諸多し

非 夷海取賣に獲るせにたり芭蕉
十月の廿日もうとを狂女なる巴桃

廿 五 今日人の病と事なり
日 五 南禪寺の二山忌 行状ハ博物筈に

廿 五 京法勝寺大衆會 應仁の項寺絶
たり今本尊藥師佛東坂下西教寺あり

廿 八 不成 梅尾虫供養 梅尾寺明惠
就日 上人の開基

日 晦 神迎 梅尾寺の御祭
日 晦 神迎 梅尾寺の御祭

月令 日ふくまらば十月一ヶ月の
雑事をしらす

御取越 十月廿八日親鸞上人御忌日也
正當日ハ本願寺小て報恩

講を修以一向宗の檀家ハ報恩講
と勤むハ當月取越て勤む故名づく

茶の場 三月小茶を摘五六
月以壺に詰てあまご山へ

上しハ九月に諸国へ出ハ十月ハ
茶人茶壺の口を開く故口切といふ

⑤口切の場の庭ぞまのけき芭蕉
口切や袴のひびふ線菫維菊 其角

⑥口切の事をちあつぎて後むし
むしくのを良しちちくむしちや 芳室

巨燧明 いづ三冬はいつくをり

時令

此部は十月の時候に
あつ事をおむむ

初冬

十月三十五日までをり又十月
の異名よもとらひ十月朔日

一日此事をとりまきり

哥夫木

隆源

あきまてとよひが初夜いつのまに
あきまてとよひが初夜いつのまに
あきまてとよひが初夜いつのまに

類題

初冬を敷

範宗

ふきのたけまきる風。水。こぼりて
ふきのたけまきる風。水。こぼりて
ふきのたけまきる風。水。こぼりて

家集 山家袖を

俊光

あきまぬとこのまふまきる山風に
あきまぬとこのまふまきる山風に
あきまぬとこのまふまきる山風に

⑦初霜 △初霜おきある。おれのこけ

初霜。あらししききうよ。まきの来て

まきのたけまきる風。水。こぼりて

まきとむらう。今初よりふゆと

まきのふとた。こぼりてあつとや

まきもまきとまら。まきもまらぬ

初霜 妻一く冬の上と記れ

⑧冬をきてまはびもあぬ初霜の

とてこれいさむ風をよぐ 家衡

⑨初霜の花をかり 重信は宗祇

初霜や取ふ繻の及より支考

⑩初霜のまきあるとても朝食の

著とち同の程ゆをむけ立甫

時雨

△初雨。まきふりついで李に

あつ。まきふりついで李に

あつ。まきふりついで李に

あつ。まきふりついで李に

初雨。まきふりついで李に

ふるみりの秋の末よりやうか秋の
かれとりそ秋にだれとはいえず。
霰雨とよ小雨のそにてあてし
かれよををせごし

〔節〕拾遺 月さうし時雨ををよあつ
かひいそやれがあひの森 貫之
千載 秋あし七流すんこのあつれ
木のよにうらる夜まはれ時雨と 馬内侍
夫木 神を月様さある時雨よも
かしくそくたれのをら 宗尊

碧玉 夜時雨
雨ふるあつ雲れまよと見へーや
附あまそ夜の枕とあらん

雪玉 山時雨
みらさ山ありしもをりしを終へく
附あつきくくは方けうきま

同 霽中時雨
初も志られてゆこそま乃らそと
くむ初のまうらそつてやん

柏玉 河時雨

それらる附あ平剛せ河と川
かふるもやまはれ村にれうあ

同 野時雨
そてく初く地をけき初上村にれ
初よあうしてあいらうらん

古今 袖時雨 躬恒
神を月附ああぬくをみらまやそ
そくくし人のたのくそまら

玉葉 松風時雨 憲實
ふるられー山の木のまあつうそと
附あをのこくそくのまの風

同 泪時雨 公顯
とくみらまを林のくくそとあうあても
ーくれとあつハ泪たうらうら

〔詞〕△川まの時雨 川まをまれか △袖時雨
なまの袖か
かきそりく△小夜時雨 さの付まあえ
夜のしんれん

△村時雨 ひじきうづら
てはひあをいふ△小附あ
△行時雨 一方とれ三方 △泪附あ
いあうとりふ

△**横雨** 風よあせよ△**夕雨**

△**松風雨** 松風をいづれのま

△**落葉雨** おちつく葉の落るる

△**志保丸** 志保の糸のつれ

△**連雨** 時あも照日あつしなれる宗祖

△**非雨** 雨もあつる世のつれ心敬

△**初雨** 初れ積も小義をほげし芭蕉

△**志保丸** 時あつる世のつれ心敬

△**非雨** 雨もあつる世のつれ心敬

△**木枯** 木を吹風をそそぐ風を

△**非雨** 雨もあつる世のつれ心敬

△**哥** 千載のつれづれにまらる木枯

△**液雨** 唐閩中の俗立冬の後十日

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**哥** 拾遺 景時

△**新古今** 瞻五上人

△**詞** 初雪をみる△**初雪** の見

△**連** 初雪をみる△**初雪** の見

△**非** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

△**初雪** 初雪をみる△**初雪** の見

晩天 ハシテニ タマノハヤシニタマノ木カハタカト
オモフホドオモヒガケナウキラノ

スレバキウニ西風ニツレテハツ
ユキカフツテキタノコト

柳絮三冬先北地 ユキハシヨ ヤナギノワタカ冬
ノウチカラキタグ

梅花一夜遍南枝 ニニハナ ムノノハナ
カヒトヨサ

ノマニミナミノエタニサキツロウタカト
オモハハツユキカハツタノテアツタ

初氷 ハツヒ △初氷解 水のまけ妻
冬十三日 ころり

哥 千載のまもれぬれしうい川乃
まにいまぬの水け解 水々人 公實

俳 初氷の一夜とありや初氷 里隠
初氷と解いまのまの ね乃 風 韓悪

狂 初氷の解るまのまの二三ね
むまびとまのまのまの 貞史

冬をされ ふさ 冬をされしあれどつふさ
冬をされしあれどつふさ

冬籠 ふさ 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

又二説も冬ふかれれば家の内ふころり
なることをもいふて季ハ三冬ふしてはし

哥 雪ふればおころりせる川も本と
まふまふれぬ花が咲ぬる 賢之

俳 雪もさくさくさくさくさくさくさく
雪のうきもさくさくさく 崇徳院
御製

俳 金屏の松の古びやまの松 芭蕉
阿婆ハ山城ハ方子やまのころり 支考

俳 雪ふればおころりせる川も本と
まふまふれぬ花が咲ぬる 賢之

俳 雪もさくさくさくさくさくさくさく
雪のうきもさくさくさく 崇徳院
御製

俳 金屏の松の古びやまの松 芭蕉
阿婆ハ山城ハ方子やまのころり 支考

俳 雪ふればおころりせる川も本と
まふまふれぬ花が咲ぬる 賢之

俳 雪もさくさくさくさくさくさくさく
雪のうきもさくさくさく 崇徳院
御製

俳 金屏の松の古びやまの松 芭蕉
阿婆ハ山城ハ方子やまのころり 支考

俳 雪ふればおころりせる川も本と
まふまふれぬ花が咲ぬる 賢之

俳 雪もさくさくさくさくさくさくさく
雪のうきもさくさくさく 崇徳院
御製

俳 金屏の松の古びやまの松 芭蕉
阿婆ハ山城ハ方子やまのころり 支考

俳 雪ふればおころりせる川も本と
まふまふれぬ花が咲ぬる 賢之

俳 雪もさくさくさくさくさくさくさく
雪のうきもさくさくさく 崇徳院
御製

俳 金屏の松の古びやまの松 芭蕉
阿婆ハ山城ハ方子やまのころり 支考

俳 雪ふればおころりせる川も本と
まふまふれぬ花が咲ぬる 賢之

草木 此部十月の草木を集む(巻)と
印するは冬三月の景物小用ひては

名草枯 △葛くろく △菊くろく

△蕪くろく △女郎花くろく △押くろく

御傘よ花の字結ば秋こどり

非女えふ州もあつてあり鬼貫

傳ふくちうもたれもあられ言水

冬椿 △早咲椿椿の花春冬

者早開と名て人賞之といふ

殘菊 九月咲のこりたる菊ちり

秋さけ白菊よあれと神を月

一ぐれよ花のこり深ける

狂 一ぐせの花のかぎりをゆ業れ

ふ代の穀不どゆりまきよ 舊徳

詩 殘菊詞 唐太宗

細葉周輕羽率團花飛碎黃

還將今歳色復結後年芳

細カキ葉カシホニナガラ青キイロアリハナノ

ニルク咲タルモミダレ飛テ黄色ニニユルナリ

コトシハコレカナゴリナレドモ又来年コノイロカ

ヲモツテサケヨト心ニチギル

同上

詩 殘菊五字對

蘭珊陶令宅 晚彫霜凜冽

寂莫費公房 曉逐露離披

冬牡丹 十月ころ花さく

雪中牡丹 元政

大莖花 石路も書く

冬菊 寒菊。多く花二重。葉

○秋無艸同。霜見艸傳。○のそり艸。葉
○初見艸。藏玉は生るれども初見艸
論多し。寒艸の事ともいふ。

○哥夫木 式子内親王

白きころはだ。らんあも。し。く。雪

藏玉 初見艸

黒れふるるるふくくしも初見
花咲よたりをねりさるらん

○(連) やまぬぬきく谷の南なる宗碩

○(非) 言にむき天窓の上ふ菊の杖嵐雪

後殿のつよもみすもやその菊梅
空を菊のほふせてききさるり五流

○(狂) らちてほねまのまふてふる
ちるよおころうか人菊の花 嘉友

○(詩) 寒菊七字對句

詩礎

顔色却因風露染 愁雪葉

英華不畏雪霜欺 傲霜枝

ハナフサハユキヤシモノアナドル
ハモラツレヌ

水仙花 千葉あり單葉あり一重の
物花白く花心黄く

○(非) 水仙ふあの日床し陸子紙支考

ふら仙や一りと花と思つる 舊園

○(狂) 竹えの云心しかくわむえつち
まおろくふあ仙のくれ 計白

○(詩) 水仙七字對句

詩礎

臺蓋元非千葉種 付雲來

羊容要是小蓮花 不染埃

コノ水仙ノモトハハナハモトヨリ
ヒノヨク女子デハナイ

八手の花 葉の岐七八あり形紅葉の
葉小似く大いなる姿あり

花白く小らしくして黒實のさるり

○(非) つくはふ八の花や水まぶり 荷風

○(抄) ちろりをふり入此木の葉よ六
藥字の名號をうきつひのぶとく

せんじく数杯飲ひ志をくくし
ていとくく吐し忽ちおころうつる

多く香むとすりとん。実を食ふに毒あり

茶の花 白花之(非)葉の花や色も香の極殊し 支考

花の香ハ葉よりすうらん山吹の如てぞとさき香の凡ぞと 自木

山茶花 南方草木狀曰山茶花數種あり 寶珠茶

石榴茶。海榴茶 花の中は碎 陶躑茶。茉莉茶。宮粉茶

串珠茶 皆粉紅色とあり葉は各同じくはと云く是ふよりの

見ても今茶人々の賞に數種のつぎきたるし季寄ふある

春の部れつぎといふハ海石榴こ椿の字小充るハ誤なり

山茶花や破となく竹尾鬼貫山菜茶や花白むいふ飲らん其角

狂つぎふも花やのちをうけりとも淡松の山茶花のむ 信面

歸花 梅花といふ(非)さき 梅

櫻。山吹などのるい此月二三さく事ありまうこ多きとき

とあり尋常の花とハかじけく賞むるに足らん

幽霊もまきくいびゆふ田井春枝の人にもえつるふ三惟

歸花 履中 天皇三年冬十一月天皇

中舟とらうく自玉妃とくとに遊宴に膳臣酒を献る時櫻

花杯中に落けり天皇これをあやしむい花時ハゆげ

していづれの取より来ること物部長真膳連は勅ありて其

花の取と求めし免多は室山は得たり天皇其あつしきをよろこびういて即宮の名と雅櫻と名付たり是くは花之日本紀か出たり

寒梅 十月の季ふ入る俳書も有
十月もは委しく十月ふ論者

枇杷の花 白き花よて八月より咲
はじめ十月頃盛よて

臘月までもあつた花の葉ハ四季とも
小散らす実ハ五月より花の頃

実の熟むるまでの間九月より
さう故自然とよく熟して味いよし

俳 脱肛の厨は枇杷の花見ると鬼貫
ふるさつをたもみせし枇杷の足紹藤

狂 今月のすにいとをわけてぞびこの
ぼろもくと落る本がらし 遊野

室の梅 △室咲室の温氣さう
△未時花とさるん

俳 室とわて面をさるる花のよ季四
月系の子れ子の経や室の梅林西

櫃の花 木と烟とて蚊やり
すもあふめりとし

油とさる物はいぬややめて食ふ
べうら小本よてよく実を結ぶ

俳 いづれぬや此屋小櫃のさま甫
山さう櫃の花をやらぬ乃朝山川

散紅葉 △紅葉散。紅葉散て物と
染る冬くと梅傘よ出さる

哥 古今此川よおをよば流るたぐ
山のさうげのおど今まきさるし

千載都ふらまきまきふおせんし
ども紅葉ふらしく此川の夏 頼政

連 秋言ちりりひのころ紅葉あけ
ちりちり紅葉ふふけあふり 小宗頂

俳 戸を叩くもふふあけりまぬ紅葉路外
秋の音せめて二おをまぬ紅葉曲巴

狂 ふしきをばりりく庭の上かを
めらでもくくさうやほされ貞柳

麥時 漢土ハ秋種と下ッくも
本邦十月より下して四月

日本後紀稱徳帝大臣吉備小勅
ありて天下の百姓ふ大小の麥を

種しむといども其時とらしんぬ

是亦早中晩の異有。

遂不成其後嗟我帝私仁十一年冬嗣公に勅ありて今より八月小待し是より時と不味といふ

枯蘆 詩よ、寒蘆とよ 西行

河の雪の孤波れまはまされや 雨しの枯草や風わらるる

あふうくたりふきりしな孤波はの あさばまーらぬ草の樹と成通

孤波はけの草をわらわてたふの 控舟あられふきり 二條院

詞 天の下のる芦。風あく。志われ芦。 ちんれき。ちんれき。ちんれき。

非ひあれどむと人昆陽の芦鬼貫 物まわや芦をれらふはつみ支考

狂 草も木もさうふさぎなきの 狂きらあめもされ合ふたり 貞木

枯柳 枯柳は文柳と同じ心ぞ 柳のうれも枯枝もよめり

哥 萬葉にわらわのをれ柳はる 人のわつふすくりえふくるるる

狂 ちんれがまはなし芽も枯柳 柳人ひとくまてなるるや 樂自

非 滝あまそまや枯柳 五樓

落葉 諸本の葉風まらうりくを 又木の葉はらうりくを

詩 落葉七字對句

風林 脱葉山 谷瘦

霜稻 登壇野 色寛

雪雲 映月 鱗々色

霜葉 飛空 威々聲

哥 春風をそと一葉をばききや山に 中く風のまもきこへ 和泉式部

連 津青の葉をちる落葉の葉智温
どくまれ白くそあたる落葉の葉宗砌

俳 一葉ちりいづるちりて月夜は嵐
も木の葉ふ割る角も井桃戸

狂 酒風のさむい河は極楽とて
わけは落葉とて又由る天王寺 徳林

木の葉 △木葉舟 △木葉衣。木の葉
つけやうめて木もある葉とも

いづれは和哥ちとていふ事へ俳の季ふ
出はぬいづる落るる木も葉といふは

木葉衣ハ木の葉を衣といふこと
又仙人ちと木の葉を衣といふ故事

木葉舟ハ舟と一葉といへど立秋の條
に一葉舟の故事より考合はる

木葉の雨 △木葉時雨。雨のふ
ごとく木葉のちるといふ

詩 風吹枯木晴天雨 白氏文集
風が枯木ヲ吹ク晴タル空カ雨ノルヤウナ

連 ちりてしるも耐風の木も
宗祇 宗祇

俳 客ある三ふらと木葉う那 芳室

狂 人ちりて木の葉をちるまをちる
吟と月月ののちりたり 貞左

朽葉 木の葉の地上に落ちたり
たがら葉のちりたりともいふ

哥 夫木朽まれぬ朽葉あはれに
まりて紅葉吹ゆる庭の木はと為相

俳 散もせてなげきもき朽葉は 矩州
ちるるもたたくて朽葉の口惜や

狂 ちるるもたたくて朽葉の口惜や
口惜やしくて汐もまもあり 舊徳

蕪 又蕪蕪ももい 俳 窟の寺
根のあはれももい 鬼貫

狂 ちりてちりてちりてちりて
ちりてちりてちりてちりて

大根 △大根引△大根。蕪
大之故大根といふ 蕪

俳 女が書とるる大根は 野坡
手は附はまのり 暁のおははる 宗維

冬木の櫻 ちりて咲の花はあはれ
冬を咲くはちりたり

雪の下

花の月 鴨 同物 冬に盛る雪の一名よて季に

格の花

いろはの葉に刺有故

生類

此部より十月一ヶ月の生類をあらわす

鶯子啼

鶯の子れなく湖中

狂 子もよこなるふたむしり夢 井魚

必用

此部より十月一ヶ月の必用を見たり其外必用の事を

破	夜九ツ 巳ノ方	夜八ツ 寅ノ方	夜七ツ 卯ノ方
軍	朝六ツ 辰ノ方	朝五ツ 巳ノ方	昼四ツ 午ノ方
向	昼九ツ 未ノ方	昼八ツ 申ノ方	昼七ツ 酉ノ方
方	暮六ツ 戌ノ方	夜五ツ 亥ノ方	夜四ツ 子ノ方

時刻 戌の日戌の刻亥の日夜の刻 事と事を用ゆる事なるを

出行作事

東方小向いてより 天道東より行月

樂事

小春の長閑るるに面を 北より烘くる日光に

脊をゆるして暖和を得るハかの 負喧黄線襖子昔の詞むむ

瓶に酒をあてり獨酌あるハハ 對客炉邊のまよぬ風寒を忘の

ぎきて春和もゆるす又枯枝を くり咲花のけりきづらうちり

天氣

今月末よりの西風半日も づきて大まけかちる物に

西北の風ハ日和をつらむら紫乃 雲うてバ大風く成亥の日雲あれバ風

生げ。電あれバ大風あり。今月ハ雨 後は風吹く東南の風ハ久く

占候

虹あれバ不作して五穀貴し 初のきのねにあらんバ

その冬々大小寒の十九日晴るれば 冬を夫よあらうらり申の日寒

うききれハ暴死多し。東の東
たてばこけり多しあり

養生 此月暖帽をひたく事
なうれ脚を冷すべし

暈の病なし。みくろふ針灸を
くぐり血凝りて津液やぶす座
臥西方を向ふべし。かろ 皮膚事
をたてしむ事をこまにせよ

衣服式 当月より綿入を暑くし
移菊表紫黄紅葉表黄
裏青

生花正 残菊。茶花。寒葵
。隈笹。霜ふり五葉

寒竹。かしま松。唐松。大山楡
。つハの籠。妙つり藤

○此月紅材の社作り。製みり
たくこと。香の物漬物秘傳
どく。梅子。木芙蓉。やう種
蒔の品く其外当月用意の品
并小養生の仕やう等委し。日本
歳時記。知術全書等。小出故略

十月 節 終

十月飲食並料理献立

禁 山椒と多く食へハ血脉と
物破る。○ふらぬ食へハ湯多

く出る。○霜ふ枯るる菜と食
へハ面のいろぬ損どとあり

好 今月羊と食して益あり
物 ○雀肉冬三月これと食

へハ陽道とたこし人として
ふあしひるきり

料理 汁 煮くう瓜 かしら
煮くうけ せう

小豆 小豆及び
木くけ 木ハ皮

あい子 やまねん やねん
きくぬ せう

清汁 きんこ かしら
漬ねん 年房きんこ

膾 朝。せまふ きんこ。せまふ
大らん。せまふ 大らん。せまふ
せう。きんこ

ふな 細つう
うど じう酒
本々 じう酒

ぼら じう酒
じう酒
虫 じう酒

白う じう酒
虫 じう酒
松 じう酒

白う じう酒
虫 じう酒
松 じう酒

差味

かた 鯛 花 じう酒
あけ じう酒

多 じう酒
本 じう酒
まん じう酒

ら じう酒
せう じう酒

軒 じう酒
じう酒

か じう酒
えん じう酒

煮物

鴨 じう酒
じう酒

大 じう酒
折 じう酒
きん じう酒

あ じう酒
ごん じう酒
あ の じう酒

きん じう酒
きん じう酒
ゆり じう酒

あ の じう酒
あ の じう酒
あ の じう酒

和會物

あ じう酒
せん じう酒
あ じう酒

さ じう酒
えん じう酒

い じう酒
あ じう酒

た じう酒
本 じう酒
あ じう酒

あ じう酒
あ じう酒

吸物

あ じう酒
あ じう酒

赤 じう酒
あ じう酒

鴨 じう酒
えん じう酒

か じう酒
あ じう酒

あ じう酒
あ じう酒

精汁

あ じう酒
あ じう酒

長 じう酒
日 じう酒

あ じう酒
あ じう酒

大 じう酒
あ じう酒

あ じう酒
あ じう酒

清汁

あ じう酒
あ じう酒

実 じう酒
あ じう酒

あ じう酒
あ じう酒

贈

あ じう酒
あ じう酒

くろんまきくわ
つひえんぼくしまか

たすい
推し
りり栗

差味

さしえ
さあんぼく
まこぶち
本づげ

そり栗
せんご
ゆ

煮物

ゆもの
ゆふ
まきび

ほり竹のこ
ひり守よ
あめけ

和會物

まな
ごめ

よせぶ
たけ
せり

ろげ
こんま
まき

あしけ
ひん
ま

吸物

あぶ
あしけ
あしけ

よせぶ
やれ
こ

時魚

しりえ
さより
まき

青物

あしけ
あしけ
あしけ

きんかん
あしけ
ゆ

防風
あしけ
あしけ

